

特定非営利活動法人 日本免疫学会
2025 年度 前期 Tadimitsu Kishimoto International Travel Award
研究発表報告書

申請者氏名	伊藤 潤哉	会員番号	0036102	
申請者の 所属・職名	東京科学大学 総合研究院			
出席会議名	19 th International Congress of Immunology			
発表論文 タイトル	RNA-binding protein tristetraprolin regulates basophil activation and skin allergic inflammation			

実施結果:

この度は、2025 年度 Tadimitsu Kishimoto International Travel Award に採択いただきまして誠にありがとうございます。

この度、オーストリアのウィーンで 8 月 17 日～22 日にかけて開催された「19th International Congress of Immunology」に参加し、研究成果を発表して参りました。本学会は世界最大規模の国際免疫学会であり、臨床免疫学および基礎免疫学を牽引するご高名な先生方から直接最新知見をご共有いただける大変貴重な機会となりました。

私自身は、自分の研究テーマである「好塩基球および皮膚アレルギーにおける RNA 結合タンパク質トリステトラプロリンの役割」についてポスター発表いたしました。当研究室では長年にわたり、最も希少な顆粒球である好塩基球の役割についての研究を行い、その結果好塩基球が希少細胞であるにもかかわらず、皮膚アレルギー炎症や寄生虫感染防御などの免疫応答において重要な役割を果たすことを明らかにしてきました。しかし、好塩基球の活性化や炎症分子産生をコントロールする具体的な分子機構については、未解明の部分が多いのが現状です。

今回の研究において、我々は近年免疫学において注目を浴びている RNA 結合タンパク質に注目し、その結果好塩基球の炎症分子産生制御を担う重要な RNA 結合タンパク質、トリステトラプロリンを見出しました。我々は好塩基球においてトリステトラプロリンが、炎症分子の mRNA を転写後に分解することで炎症分子産生を抑制するとともに、マウス皮膚アレルギーモデル全体を制御する重要分子であることを解明しました。今回の発表では好塩基球の役割や mRNA の転写後分解の解析法などについて多くの方からご質問をいただき、今後につながる非常に有意義な議論ができた実感しております。

また自身の発表以外にも多くの方の発表を拝聴し、勉強させていただきました。ウェットの実験を用いた基礎免疫学の発表も非常に素晴らしいものが多かったのですが、臨床免疫学研究についても欧州連合全体から患者検体を集めてくるなど大規模かつさらなる進展が期待されるものが多く、今後はヒトと対象とする研究にもより注目していきたいと思います。

最後になりますが、このような貴重な機会をいただいた岸本忠三先生、選考委員の先生方、ならびにご推薦いただきました烏山一特任教授に深く御礼申し上げます。本学会で得た知見を元に、微力ながら免疫学のさらなる発展に貢献できるように邁進して参ります。